

名古屋 文化 情報

2013
7・8
July / August

No. 351
NAGOYA
Cultural
Information

名古屋市文化振興事業団
設立 30 周年に寄せて





名古屋市文化振興事業団設立30周年に寄せて

公益財団法人名古屋市文化振興事業団は、今年、設立30周年を迎えます。

これまで多くの皆様に支えられ、30周年という節目の年を迎えることができました。名古屋市の文化振興計画における基本理念「受け継ごう、創ろう、広げよう、文化共創のまち名古屋」を実現するために、企画・マネジメント力やさまざまなジャンルの芸術文化団体等との密接なつながりを活かし、専門家集団として文化振興に総合的に取り組んでまいりました。

これからも、地元の芸術文化関係の皆様とともに、市民の皆様にご喜ばれる取り組みを進めてまいりますので、かわらぬご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。重ねて、これまで支えていただきました皆様に心から感謝を申し上げますとともに、各界から30周年を記念してご寄稿をいただきましたので、ご紹介させていただきます。



Contents

| | |
|----------------------------|---|
| 名古屋市市民文芸祭 受賞作品…………… | 2 |
| 名古屋市文化振興事業団設立30周年に寄せて…………… | 3 |
| 名古屋市文化振興事業団設立30周年記念事業…………… | 6 |
| 第29回芸術創造賞受賞者決定 ほか | |
| 名古屋市文化振興事業団設立30周年に寄せて…………… | 8 |

表紙

作品

「ツタンカーメンのえんどう豆」

(1996年 / ブロンズ / 145 cm × 85 cm × 124 cm)

金面で有名なツタンカーメン王の墓の副葬品の中にえんどう豆の種があった。三千年以上の夢からさめた豆は立派に育ち、実をつけた。見事、生命復活をしたえんどう豆を、その葉、つる、蝶で構成して彫刻とした。(愛知県美術館蔵)

加藤昭男 (かとうあきお)

1927年 愛知県瀬戸市に生まれる
 1953年 東京藝術大学卒業
 1980年 松下政経塾に「明日の太陽」制作設置
 1994年 第25回中原悌二郎賞受賞
 2002年 第2回円空大賞受賞
 現在 武蔵野美術大学名誉教授、新制作協会会員

「なごや文化情報」編集委員

- 倉知外子 (オクダ モダン ダンスクラスター副代表)
- 酒井晶代 (愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授)
- 田中由紀子 (美術批評/ライター)
- はせひろいち (劇作家・演出家)
- 米田真理 (朝日大学経営学部准教授)
- 渡邊 康 (相山女学園大学教育学部准教授)

二〇一二年 名古屋市市民文芸祭「
 (第六三回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部
 俳句の部受賞作品より

※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆

ばあちゃんもこうかをうたうにゆうがくしき

瀬戸市立水野小学校一年

伊藤 桜子

◆市会議長賞◆

盆踊り遠くでいつも見てるだけ

名古屋市立有松中学校二年

松本 直子

◆市教育委員会賞◆

きよねんよりかかとでているサンダルよ

名古屋市立大宝小学校二年

国枝 咲和

◆市文化振興事業団賞◆

雪だるまくずれる前に写真とる

尾張旭市立洪川小学校三年

中島 由斐

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆

風鈴を吊せばそこに風通る

名古屋市立はとり中学校三年

石垣 翔規

◆中日賞◆

蝉の声を閉めても聞こえてくる

名古屋市立有松中学校二年

磯谷 柚菜



名古屋市文化振興事業団 設立30周年に寄せて



特別寄稿

名古屋市の文化施策の軌跡 —名古屋市文化振興事業団の背景—



藤井 知昭

(アジア太平洋無形文化遺産研究センター所長)

Tomoaki Fujii

名古屋市文化振興事業団が設立30周年というのは筆者にとっていろいろ印象深く思い起こされる歴史をもっている。この事業団設立の提案を起草した一人であり、事業団に関して数多く寄稿したり、企画に参加してきていることなど、多くのかかわりをもってきたといえよう。

事業団が設立する以前に話を遡ると、名古屋市は、1975(昭和50)年4月、舞台芸術関係者16名を集めて、市民芸術祭の在り方を検討し、「市民芸術劇場」として企画委員会を発足(委員:久保則男、藤井知昭、松本吉正、水野鉄男)した。文化に関し、市民を招集し、名古屋市の文化行政の検討、提言を進める先駆的役割を名古屋市が進展させていたといえよう。

1975年11月、名古屋市は「市民文化懇談会」を発足させ、亀山巖はじめ15名の委員構成で、芸術振興の議論が進められ、その中で芸術文化団体の活動実態、ホール使用の状況等の調査や、その分析を含めて文化振興への方針をまとめ、1978年『市民文化をすすめるための提言』をまとめ刊行した(提言委員:亀山巖、原陟、上阪堅一郎、藤井知昭、牧定忠)。この「提言」を軸に「芸術創造センター建設基本構想」「文化振興事業団設立」「文化振興のための基金」等がまとめて提案されてゆき、やがてこの懇談会は「市民文化委員会」と改称され多くの名古屋市への文化振興への提案をすすめる軸として機能していった。

市民文化懇談会の「提言」に基づき、「芸術創造センター」の構想が練られ、新たな舞台芸術の創造や国際芸術文化交流などの実現のための機能などを含めた構想とともに、その運営主体についての議論が重ねられ、その軸に「文化振興事業団」設置の構想がまとまり、設立された。1980年10月に発刊の「なごやの文化」(第1号)、更にこれをもとに新たに刊行された「なごや文化情報」(第1号)が1984年4月に刊行されるなど、これら情報誌にその記録が詳しく残されている。

それらにもあるように1983年11月、芸創センターが開館し、多彩な開館行事を催したが、その芸創センターの運営、管理などの組織として文化振興事業団は発足、出発していった。

当初、芸創センター構想は音楽、舞踊、演劇、伝統芸能等の特有の舞台構成に加えて芸術展示室等の大規模な視点だったが、市側から土地候補が示されるなどの経緯の中で、現在の芸創センターを視野にした構想が1978年10月にまとめられた。5年後に開館を想定し、その間の市の文化振興のために「提言」を指標として、文化団体活動助成、市芸術賞の設置等が進展し、市民芸術劇場での本格的な企

画による催しが展開された。実績ある団体や個人の公演に加えて、新たに将来を展望する企画も立ち上げた。

「今日の音楽」、若手を視点に入れた「はばたく演奏家たち」「はばたくバレリーナたち」等が出発し、シリーズ化する起点になった。さらに、毎年必ず名古屋の文化振興を指標にテーマを設定したシンポジウムは大きな注目を集めた。また、国際化を視野にした中国などアジアの伝統芸能をはじめとする招聘公演、文楽等日本伝統芸能や現代芸術の交流も進展していった。

そして1983年11月に芸創センターが開館し、シンポジウム「名古屋の芸術文化の未来を考える」(コーディネーター藤井知昭)をはじめ、この地を代表する15公演によって開館した。

芸創センターの管理、文化基金、市民芸術劇場などの運営を行う財団法人として、名古屋市文化振興事業団は1983年7月1日に発足(亀山巖理事長)、同年11月3日に芸創センターが開館、名古屋文化の新たな展開が芸創センターを一つの軸に始まった。

しかし主催とはいえ、すぐれた実績をもつ団体や個人の招聘を主体とする舞台公演が主であった。そこで、この芸創センターの機能や特性を活かす、新たな創造的公演を実施する議論を重ねて企画公演を立案していった。

その第一は、音楽・演劇・舞踊などジャンルをこえた総合的舞台。第二に、舞台人育成のために10回以上の公演で、まさに舞台上で舞台人を育てたいと考えた。さらに、一般市民の観客の積極的参加をすすめるために、ポピュラリティーのある作品を選ぶ。第三に、新たな創造的視点を広げるため、演出家等は全国から選んで起用するなどの方向性を定めていった。

この企画による総合舞台は、鈴木完一郎はじめまだ有名になる前の宮本重門や中村時夫らを演出に引き、8千人を超える観客が集まったり、東西の評論家も多く鑑賞し、さらにはオリジナル作品「照手と小栗」では、文化庁の主催としての東京公演に招かれるなどの歩みとしても進展していった。

「三文オペラ」を皮切りに「ポーギーとベス」「マイ・フェア・レディ」「サウンド・オブ・ミュージック」「回転木馬」などなど、公演権の獲得など苦労は多かったが、このシリーズの出演を機に多くの舞台人が輩出されていった。

名古屋市文化振興事業団の30年は、財政的な背景や諸条件によって変化は少なくないが、名古屋の文化の基盤の役割の一端を大きく担った歩みではあったと考えている。



芸術は市民の財産

相羽 規充

(前名古屋市文化振興事業団理事長)

芸術は生きるために絶対不可欠なものとはいえません。しかし、もし私たちが今、芸術の全くない世界に生きていたとしたら、生きる喜びや心の癒しや勇気が大きく失われることになります。その意味では芸術は、公共財、つまり市民の財産ともいえます。

芸術は1990年代後半から医療、都市開発、福祉の分野などでその必要性が認識され、芸術の社会的な存在価値が高まってきました。私は2年間にわたり、名古屋市文化振興計画の策定に携わり、名古屋の芸術関係者の方々と名古屋市の文化振興の現状や将来について議論しました。名古屋には歴史遺産、芸どころ、ものづくり、デザインなど特色をもった色々なキーワードがありますが、何を優先していくかが重要です。

名古屋市文化振興事業団は、現在、市民会館をはじめ芸術創造センターや13の文化小劇場など多くの文化施設の管理、運営を行っており、新しい自主公演も実施しています。こうした文化施設をいかに市民に活用してもらうか、また市民が興味をもつイベントを企画して多くの市民に楽しんでいただくか工夫することも重要です。ただし毎年、大変多くのイベントを実施していますが、私が事業団に在籍し

Norimichi Aiba

ていつも広報の不足を痛感しました。新聞、テレビ、雑誌はもとより事業団でも近年、取り組みはじめたフェイスブックのような新しい方法で、少しでも市民に多く情報を提供することが大切だと思います。

先に述べたように芸術は市民の財産です。事業団はそうした市民の貴重な芸術という財産をうまく活用し、市民の心の糧になるように30年間にわたって多方面に活動してきました。しかしながら当分は芸術には厳しい環境が続くと思います。

私自身、副理事長、理事長と6年間事業団にお世話になり、色々勉強させていただきました。芸術文化には投資が必要といわれる中、予算の削減や2003年に施行された指定管理者制度の煩雑な事務や様々な改善策に追われ、事業団本来の仕事が十分にできているとは思えません。事業団自体がこれからどう活動していくのか、例えば行政や企業への積極的な支援活動、ボランティアとの協働、資金調達のための専任職員の養成、芸術団体同士の提携強化など30年を契機に新しい事業団の進むべき道を真剣に考えていただければ幸いと願う次第です。



30周年記念に寄せて

浅井大美子

(箏曲演奏家)

名古屋市文化振興事業団設立30周年、誠にありがとうございます。名古屋の文化の普及発展に多大なご功績を挙げられた事業団に、こうして30周年のお祝いのお言葉を述べさせていただけることに感謝申し上げます。

さて、私は伝統文化の三曲の分野で、子どもたちに「文化の素晴らしさを、身近に感じてもらう」という『子どものための巡回劇場』という企画でお声をかけていただいて以来、長きにわたってお付き合いをさせていただいております。子どもたちに伝統文化に親しんでもらうためにはどうしたらいいか、毎日模索を繰り返しながら事業団の皆さんと一緒に演奏会当日を迎えたことも、今では良い思い出になっています。以来、日本の心でもある三曲の素晴らしさを知ってもらおうと、子どものための巡回劇場や伝統文化フェスティバル、地元名古屋の優秀舞台公演などの事業団の事業での演奏を行ってまいりました。

また、評議員として事業団の運営に携わらせていただき、様々なジャンルの文化事業についても勉強させていただく機会をいただきました。事業団との事業で忘れられない思い出の中に、東日本大震災の直後に開催された「被災地支援コンサート」があります。現地の悲惨な状況を目の当たりにして、「被災地のために出来ることが何かないか」と考えておられた他ジャンルの先生方と一緒に市民会館でチャリティーコンサートを開催させていただきました。これも評議員というご縁で事業団から声をかけていただき実現したのですが、僅か

Tamiko Asai

10日間という準備期間のため、舞台の演出も事業団の方の手作り、チラシは事業団作成の白黒のコピー刷りのものでした。公演当日は出演者一人ひとりがお来場の皆様に被災地への支援をお願いし、多くの方からたくさんの義援金をお預かりすることができました。義援金は市を通じて被災地に送りましたが、この時、事業団の方々普段は縁の下で支える役割に徹しているけれど、いざという時は文化事業のプロ集団として、力を発揮される集団だと思いました。

私はNPO活動を通じて海外で演奏する機会をいただいておりますが、海外では日本の伝統文化に関する関心がとても高く、毎回多くの方に演奏会場に足を運んでいただけます。また交流会等で現地の子どもの前で演奏すると、曲目は分からなくてもみな瞳をキラキラ輝かせて聴いてくれます。音楽は世界共通で国境はないとよく言われますが、三曲も例外ではないようです。名古屋の子ども達も瞳を輝かせて聞いてくれるような演奏を続けていくこと、またそれを世界の子どもの心に繋げること、そして大人の方には子ども達に伝統文化を伝えていくことの大切さを知ってもらうことが私の使命であり、それを支えてくださるのが事業団の使命であると考えております。文化を教えてくださいました事業団があればこそ、私も文化を伝えることができたと思っており、事業団には改めて感謝申し上げます。事業団におかれましては40周年、50周年と末永く名古屋の文化の発展に寄与して下さいますようお願い申し上げます、私のお祝いの言葉とさせていただきます。



「物から心」へ、事業団の歩みと「華道」

石田 秀翠
(華道石田流家元)

Shūsui Ishida

事業団の30周年お祝い申し上げます。

30年前、私は41歳でした。事業団の評議員、市民ギャラリー（現在の市民ギャラリー栄）の設立委員、名古屋市民芸術祭「いけばな芸術展」の実行委員長、そして、理事、副理事長、顧問、公益財団法人となった現在は評議員を務めさせていただいています。お陰で名古屋市の文化行政の一端を学ぶことが出来ました。厚くお礼申し上げます。設立当時は「華道文化」は問題がありました。行政上の認識は「一般的娯楽・花嫁修業」など「その他」のジャンル扱いでした。私は陳情し「生活芸術」という文化行政上の認知を得ることが出来ました。これも事業団のフォローがあったからです。

また、今日では公的美術館での花展は許可されておられません。理由は水を扱う、花材に虫がいる、かびが生えるなどです。市民ギャラリーの開設により花展が許可され、ギャラリーのオープニングの花展を依頼されました。今日は市民芸術祭の主催事業として、毎年秋に開催され、65流派、244名の作家が出品しています。今年も第22回の花展準備が6月から始まります。1万人を超える入場者を毎年維持してきました。行政が主催する市の芸術祭の主催事業としては、全国でもユニークな花展です。

残す課題は行政からの芸術・文化選奨や創造賞の対象になること

です。「生活芸術」は選考条件を満たしていますが、いまだ評価が上がりません。これは華道界の芸術意識が低いのか、理解と認識が浅いのか残念なことです。

華道界には「伝統華道」から「くらしのいけばな」、そして「現代いけばなアート」のジャンルがあります。「現代いけばなアート」には既に造形芸術やインスタレーションへ、越境するジャンルも多く、海外では「アーティスト」として活動しています。将来的には芸術としての評価を受けることを期待しています。

現代は「物と心」のバランスと幸福度への価値観が曖昧な時代です。いじめ、うつ病、自殺、ニート、道徳心の欠如などの社会問題で人間性をなくす時代です。「心の豊かさ」を政治、教育、文化では大きく取り上げていますが一向に本論がバラバラで見えてきません。事業団の存在意義は重要です。

現代は個々の芸術文化ジャンルの発展を民間だけで補うことは不可能です。行政が芸術文化の環境づくりを主導し、これを財界、民間が支援する体制づくりが必要です。名古屋市が日本一の芸術文化モデル都市となることを願っています。私はこれからも日本の伝統文化「華道界」のために精進いたします。御支援と御指導をお願い申し上げます。



共に力合わせて文化の発展を!

栗木 英章
(劇作家・劇団名芸代表)

Hideaki Kuriki

事業団設立30周年おめでとうございます。

今までいろいろご苦労を重ねての歴史だと思います。尽力された多くの皆様に敬意を表します。

十数年前、長年勤めていた民間企業を早目に定年退職して、少々茫然としていた私に声をかけていただき、評議員になったのがつなりの始まりだったでしょうか。それまで、長時間労働と地域劇団の活動に追われていた制約から事業団は遠い存在だったのですが、それ以降、「なごや文化情報」の編集委員や企画公演の制作委員、市民芸術祭の実行委員等々様々な役を与えていただきました。

そのお陰で各種ジャンルの方々と交流することができて、また事務方で奮闘される事業団の皆さんと話し合いながら各々の事業を進めることができたのは大きな喜びであります。

編集委員としてはこの地の演劇・芸術の開拓者の貴重な体験がうかがい、企画公演ではオーディションの時点から地元の若い才能に触れることができました。芸術祭も最近は財政難のあおりを受けて

規模を縮小されているのは残念ですが、受賞する舞台や「名古屋が舞台の短編小説」(ショートストーリーなごや)などから色々刺激ももらっています。

30年の積み重ねで前進した面は多々ありますが、一方で「劇場法」などで指向されているように企画力、ソフトの充実がより大きな課題となっています。しかし、事業予算は管理運営費に圧縮されて、総予算の2割程度にとどまっているのではないのでしょうか。その増加を期待しつつ、当面は限られた範囲でやりくりせざるを得ないことでしょう。

以前ほどではないにしても、まだ「東京」の著名人頼りが強いように思います。もちろんその実績は評価できますが、もっと地元の発信力を信頼すべきでしょう。演劇分野でも新しい世代が全国的な賞を得て、実際の作品と舞台も高い評価を受けています。

固定観念にとらわれていると、全ての文化・芸術は陳腐化します。共に力を合わせて、この地の文化・創造を発展させていきましょう。

名古屋市文化振興事業団 設立30周年記念事業のご案内

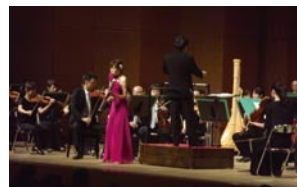
名古屋市文化振興事業団は7月1日に設立30周年を迎えます。
これまで事業団は地元の文化芸術関係者の皆様とともに、様々な事業を開催してまいりました。
今年は下記の事業を30周年記念事業として開催いたします。

ナゴヤコドモアートビレッジ

ナゴヤコドモアートビレッジは、子どもたちがさまざまな芸術に触れることで普段味わえない感動や、発見があることを願い、クラシックコンサートとさまざまなジャンルのワークショップを開催する事業です。

コンサート

星空への招待状 ～ディズニーの名曲と星空シンフォニー～
日 時 平成25年8月26日(月)14:00
会 場 日本特殊陶業市民会館 ビレッジホール
出 演 指揮/濱津清仁 司会/加藤恵利子 天文解説/毛利勝廣(名古屋市科学館学芸員)
管弦楽/セントラル愛知交響楽団
料 金 1,500円<全指定席> ※完売しました。



平成24年度ナゴヤコドモアートビレッジ コン서트

ワークショップ

日 時 平成25年8月26日(月)～28日(水) 10:00、14:00
会 場 日本特殊陶業市民会館(リハーサル室・会議室)、音楽プラザ(合奏場)
内 容 演劇、ダンス、美術など15講座
料 金 無料～材料費1,000円程度
応募方法 往復はがきで7月6日(土)<消印有効>までにお申し込みください。
※詳細はホームページ(<http://art-village.info>)をご覧ください。



平成24年度ナゴヤコドモアートビレッジ ワークショップ

名古屋の演劇人が贈る名作劇場『國語元年』

“名古屋の演劇人が贈る名作劇場”と銘打ち、日本を代表する劇作家井上ひさしの名作『國語元年』を、日本演出者協会若手演出家コンクール優秀賞をはじめ数々の演劇賞を受賞している劇団あおきりみかん代表鹿目由紀の演出により上演いたします。

日 時 平成25年9月14日(土)18:30 15日(日)11:00、16:00 16日(月・祝)11:00、16:00
会 場 東文化小劇場
作 井上ひさし
出 演 鹿目由紀
出 演 岡田一彦、黒河内 彩、栗木英章、中田裕子、いのご福代、手嶋仁美、早川ともりのり、木村庄之助、松井真人、真白ねづみ、大谷勇次、大嶽隆司
料 金 3,500円<日時指定・自由席> ※事業団友の会会員は1割引(事業団前売り扱いのみ)



井上ひさし
撮影：落合高仁

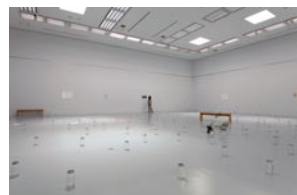
鹿目由紀

ファン・デ・ナゴヤ美術展2014

毎年、芸術文化の新たな発信源となるような企画アイデアを公募し、名古屋から発信する美術展のファンをひとりでも増やそうと「ファン・デ・ナゴヤ美術展」を開催しています。今年度は「MULTIPLE LENS(仮)」を予定しています。

採択企画 「MULTIPLE LENS(仮)」
企 画 者 土方大、菊谷達史
日 程 平成26年1月9日(木)～1月26日(日)※休館日14日(火)、20日(月)
会 場 市民ギャラリー矢田
料 金 無料

ファン・デ・ナゴヤ美術展2012
「鍼灸する景色」第1展示室(伊藤正人企画)
撮影：藤井昌美



プロとつくる舞台～ホップ・ステップ・ジャンプ

一般公募による市民を対象に、本格的な演出や照明・音響などの舞台効果を施した舞台で成果を発表する朗読劇です。
新美南吉「ごんぎつね」を題材として、地元劇作家の台本による新作を披露します。

日 時 平成26年1月18日(土)14:00
会 場 芸術創造センター
台 本 佃 典彦
構成・演出 西尾栄儀
出 演 オーディションの合格者30名とプロの役者若干名
※オーディションは9月22日(日)に開催。8月下旬応募締切。
料 金 1,000円<全自由席> ※事業団友の会会員は1割引(事業団前売り扱いのみ)
※11月中旬発売予定



平成24年度みんなのリーディング「KANOKO」

名古屋市文化振興事業団2014年企画公演 Theatrical Music Grand Gala Concert～時間旅行～

毎年地元で活躍する音楽・演劇・舞踊をはじめとする舞台人の総力を結集し、新しい可能性を追求する企画公演を開催してきました。今回は30作品目の特別企画として、オペラからオペレッタ、ミュージカルへと続く総合舞台芸術の歴史を名作の中から選び抜いた珠玉のアリア、ミュージカルナンバーとともに辿るコンサートを開催します。

日時 平成26年2月21日(金)18:30 22日(土)11:00,16:00 23日(日)11:00,16:00
 会場 青少年文化センター
 構成・演出 広渡 勲 音楽監督・指揮 古谷誠一 振付 高木順子
 演奏 セントラル愛知交響楽団
 出演 井原義則、岩川 均、江端智哉、加藤恵利子、加藤典子、鍋木勇樹、佐野文彦、塚本伸彦、夏目久子、日比野 景、やまもとかよ、吉田裕貴 他、オーディションで選ばれた出演者
 ※オーディションは申込締切済み。
 料金 S席4,500円、A席3,500円<全指定席>
 ※事業団友の会会員は1割引(事業団前売り扱いのみ)
 ※11月上旬発売予定



2013年企画公演「こうもり」

問合せ 名古屋市文化振興事業団事業案内・チケットガイド TEL052-249-9387(平日9:00～17:00)

第29回 芸術創造賞 受賞者決定

芸術創造賞は、名古屋市文化振興事業団の初代理事長・故亀山巖氏から受けた寄付を基金とする賞です。名古屋を中心に活動し、前年度における芸術創造活動が特に顕著で、今後の活躍が期待される個人または団体に贈るものです。このたび第29回の受賞者を決定いたしました。



竹市 学 (能楽笛方)

1983年に能楽笛方藤田流宗家十一世藤田六郎兵衛に入門し研鑽を積む。確かな技術に裏打ちされた能笛は名古屋能楽界からの信頼も厚く、東京・京都などの能楽師が中心となる海外公演にも数多く出演するなど若くして全国的にも高い評価を得ている。また、能笛の技法を活かし、他ジャンルの音楽・演劇などの舞台創造の仕事にも積極的であり、1999年にはオペラ『天守物語』の序曲演奏に携わり、2000年に能舞「乱」(映像・音・舞踏とのコラボレート作品)を構成・演出・出演するなど能楽囃子を基調とした新しい演劇の創造、音楽作品の作

曲にも取り組んでいる。

平成24年度の活躍も顕著であり、観世喜正らとともに能楽の普及を目的として立ち上げた同人会である『能の旅人』の第7回公演では「屋島」弓流を素晴らしい演奏で聴かせ、同じく武豊町ゆめたろうプラザで行われた『能の旅人』公演では演奏に加え、ワークショップ講師も務めた。また、2013年1月には名古屋観世九事会にて難曲「望月」の笛を務めている。

江戸時代より名古屋に伝承されている藤田流の確かな演奏技術を継承し、優れた舞台成果をあげており、他ジャンルとのコラボレーションや市民への能楽の普及にも積極的に取り組む姿勢からも、今後一層の活躍が期待される。



名古屋市文化振興事業団 まちづくりのため大学等と連携協定

名古屋市文化振興事業団では、名古屋市内の文化施設を管理運営する中で、より効果的に名古屋の文化を盛り上げるため、地域の大学と連携協力に関する協定の締結を進めています。

この4月に、新しく音楽芸術学科を開設した守山区にある金城学院大学と守山区との三者、6月には、名古屋市内唯一の音楽大学である名古屋音楽大学と連携協定に関する調印式を行いました。

このような取り組みにより、魅力ある地域文化を発信し、文化芸術を通じたまちづくりに貢献するとともに、次代を担う人材の育成に努めてまいります。





われわれは芸術を必要としているのか？

小林 亮介

(名古屋造形大学 学長)

Ryosuke Kobayashi

「小林先生、文化と文化行政は違うのですよ！」これはある地方小都市の文化振興課の職員から発せられた言葉だ。業者丸投げのイベントばかりを押し進め、時として過激な表現をも含む若者文化への市民の反応を過剰に気にする職員に対して「口当たりの良いものだけが文化ではない。そうでないものの中に重要な意味が含まれていることもある」と私が意見を述べたことに対して発せられた言葉だ。

「あなたたちのやっていることは私には理解できません。しかし当市にとって大切なことをやっていることは分かります。だから、あなたたちを支援します」これは、ドイツのある都市の文化行政のトップが、大学を出たばかりの若いアーティストたちが自主運営する現代アートのギャラリーへの支援を決めた際の言葉だ。

「ともすれば芸術は社会を動かすために不要だと思われがちだが、これからは日本のサバイバルのためにも、芸術を知的資源として捉え直さなければなりません」これは、昨年、芸術表現学会立ち上げの際に文化庁長官が述べられた言葉だ。海外経験の長い長官は、特に欧米で如何に芸術が社会に支えられてきたかを、身をもって経験されてきたのであろう。

日本においては「あいちトリエンナーレ」をはじめ、全国で多くの現代アートの祭典が催され、あらかじめ評価の定まった作品を「学ぶ」こ

とから私たちはやっと卒業し始めている。いま生まれつつある芸術に立ち会うという醍醐味が理解されてきているとしたら、それは喜ばしいことだと思う。

しかし、一方で、初等・中等教育での芸術分野の授業時間が削られ、教員も削減されている。学力の低下が叫ばれば芸術の授業が削られ、経済が傾けばまず文化予算が削られる。一方で、大学を出たばかりの若手アーティストを支えるシステムもなく、才能ある人たちが筆を折らざるを得ない状況が続いている。

日本は芸術を必要としているのかいないのか。あるいは、どう捉えようとしているのか。

そんな中で、名古屋市文化振興事業団の果たしてきた役割は決して小さくない。30年間、幅広い世代に対して様々な事業を進めてきたことは高く評価されてよいと思う。事業団の設立・運営に尽力されてきた諸先輩方、日常業務に携わっている職員の方々に敬意を表したい。

まずは市民、そして行政に携わる方々が心から芸術を必要としなければ日本の芸術は衰退の一途を辿るであろう。予算が削られ続け、中止に追い込まれる事業も出るなど厳しい現状ではあるが、事業団には名古屋の文化振興のため、次の10年を力強く歩んでほしい。



誇り

佐々木 伊利子

(NPO法人日本室内楽アカデミー 理事長、ピアニスト)

Yoriko Sasaki

この度は名古屋市文化振興事業団が設立30周年を迎えられ、おめでとうございます。

30年間の思い出で一番深く心に残っているのは「誕生」です。名古屋市役所の文化担当者と文化に携わる方たちが志をひとつにして、事業団が希望に燃えた門出をした事です。

亀山巖先生の3000万円には及びませんが、私も他の文化関係の方たちと共に寄付をさせていただきました。名古屋市の当時の浅井助役も私費を出された事でも分かるように、いかに官民一体の立場を超えたものであったかと、またそこには利害、義理など全くなく「名古屋の芸術、文化の向上」への礎作りをという思いでした。

その後の30年間に数年携わった評議員会、理事会などで感じたことは、実に多岐にわたった事業をやっている事です。ある時、私が会員である東京の音楽プロデューサー協会の例会で、名古屋市の事業団の事業に関する話をしたところ、皆さんがびっくりされました。名古屋のイメージは「田舎」の文化不毛の都市としか認識されていないからでしょう。

名古屋が豊かな都市だからこそ実現できているのかもしれない

んが、他地域では不可能な活動をしているのだという誇りを持ちたいものです。

ホールはもとより、数多くの練習施設はプロだけではなく、アマチュアの利用もあり殆どの施設が100%に近い稼働率です。

最近、私が名古屋市民芸術祭の審査に関わらせていただく事になり、この地の芸術活動の現状をいくらか知る機会を得、良い事、そうでない事等あり、3つほど挙げてみました。第1はアマチュアの方のエントリーが増えたこと。これは先程の練習室の充実で活動し易くなってきたからかもしれません。第2にエントリーする方の企画内容が、以前に比べ内容の充実したものが少ないこと。第3には予算の削減です。解決策は事業団の事業の拡大化にも起因するかもしれませんが、方向性の規約化など、この辺りで見直す時期にきているのではないかと心配です。

何事も創める時は簡単ですが、継続していく難しさは、どの団体でも同じです。これからの事業団運営も継続の苦しみがあるかと思いますが、「誇り」を持って「名古屋オリジナル」の活動を果たしていく事をお祈りし、お祝いの言葉とします。



私も育ててもらった30年

関山 三喜夫

(現代舞踊協会中部支部長)

Mikio Sekiyama

今回事業団より設立30周年の記念号のための原稿を、と依頼を受け、この30年を振り返り時間の重みに驚いております。あらためて「30年の歩み」おめでとうございます、ご苦労さまでしたと申し上げます。

私自身この30年名古屋市との関わりと事業団での関わりとが幾重にも交差して整理が付きにくいのですが、やはり一番心に残るものは、1985年に始まった企画公演です。地元で活躍する音楽・演劇・舞踊の関係者の総力を結集し「舞台が舞台人を育てる」をキーワードに毎年続けて催されたミュージカル・オペレッタ・オペラなどの企画公演。この2月に市民ギャラリー矢田で催された「企画公演のあゆみ」の展示で、29枚並んだ各年のポスターや舞台写真を拝見しすごい実績だと感謝し、その一端に企画委員として参加できた幸せをかみしめております。

第1回の音楽劇「三文オペラ」は藤井知昭氏を中心に、何もわかっていない私が舞踊関係者という立場で企画委員に加えていただき、6回目のミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」までお手伝いさせていただきました。そしてまた平成18年度の第23回オペレッタ「伯爵嬢マリツツア」より、次回平成25年度第30回の記念公演の企画も委員として参加させていただいております。

また、平成23年度には、事業団主催事業「地元名古屋の優秀舞台公演」として、私の所属する(社)現代舞踊協会中部支部と共催で「花より華らしく…芸術に生きた女・女・女」と題した公演を開催しました。これは3人の女性振付家が地元縁のある3人の女性芸術家をテーマにした作品を創作し、披露するもので、近藤夕希代の「夢追花」(花子)、倉知可英の「Ma Sada Yacco〜凜として咲くが如く〜」(川上貞奴)、服部由香里の「未完の花」(三岸節子)の3作品を創作、千種文化小劇場にて3日間4公演を催すことができました。この共催事業では私たち現代舞踊の仲間たちに、大きな力をもらいました。

同じく、名古屋洋舞家協議会では、平成4年度名古屋市民芸術祭主催公演として「エンドレス・サマー夏畑」、また平成10年度も同じく芸術祭主催公演「地霊たちの嬉遊曲」を上演しました。

私個人でも3回の「青少年のための芸術劇場」、2回の芸術祭の参加等、色々関わってきました。今は評議員にも加わらせていただいております。

事業団の30年の歩みは、私を大きく育てていただいた30年です。感謝の気持ちでいっぱいです。



「文化不毛の地」と言われた名古屋

戸田 鎮子

(文芸同人誌「じゅん文学」主宰)

Shizuko Toda

もう30年になるのか! と周りの人を眺めてみる。例えば「じゅん文学」で最も若い同人は32歳である。彼が小説の勉強をし始めたのは10年ほど前だから、もう当たり前前にこの事業団の存在や恩恵を認識しているのだろう。「ショートストーリーなごや」の応募もしたことがあるらしい。

私が文学に関心を持って故・小谷剛主宰の「作家」に入ったのは昭和30年代半ばで、当時は公的機関はもとより私的機関でさえ、積極的に芸術文化に関心を寄せる団体はなかった。

戦後初の芥川賞を受賞した小谷剛氏が名古屋から出て行かなかった理由の一つは「文化不毛の地・名古屋の文化を支えたい」ということであった。「作家」の設立者の一人でもあった故・亀山巖氏もまた人一倍、名古屋の芸術文化の振興に熱心で事業団の設立にも尽力された。

多くの熱心な支援や協力があつたにも拘わらず、事業団が発足したのは戦後38年も経っていて、私も「作家」に入って20年以上が経過していた。

名古屋は芸所と言われて昔から日舞や古典芸能が盛んであった。戦後の焼け跡から復興してやがて高度成長時代を迎え、ピアノ

などの楽器を習う人も増えてきた。ところが、そういう風潮でさえ、最初のうちは優雅な「お稽古事」という意識が強かったように思う。

事業団が発足した昭和58年ころまでは戦後30年以上も、大きさに言えば、名古屋の芸術文化は外国や東京での価値観に追随していたような気がする。やはりまずは地元でのきちんとした評価や支援が欲しかったと思う。

事業団の設立が実現して初めて、名古屋の芸術文化全体に経験豊かな専門家の目が向けられたと言っても過言ではないだろう。多くの人が「お稽古事」ではなくて、芸術に目覚めた。各区に文化小劇場が出来たとき、他府県の特に演劇に携わっている人から「名古屋は恵まれているね」と羨ましがられたことが忘れられない。市民芸術祭賞や芸術創造賞も、受賞者だけでなく大勢の人の励みになったことだろう。

今やもう名古屋は「文化不毛の地」ではない。気がつくと、たくさんの花が咲いて、今更のように事業団の存在と功績に気づかされる。益々のご発展を祈念します。



修道院長様

夏目 久子

(名古屋文化短期大学客員教授・名古屋二期会理事)

Hisako Natsume

名古屋市文化振興事業団設立30周年おめでとうございます。
只今、名古屋二期会「夢淡き大須歌謡特選」、大須演芸場での4回公演を終えて帰ってまいりました。二期会で最も柔らかい路線の人気公演も、4年目に突入しました！

思えば昨年結婚しました末娘が30歳はとうに過ぎておりますから、3人目の子育ての第一段階がそろそろ終わろうとしていた頃が事業団の設立だったのですね。主人の転勤の度に馴れ親しんだ地に涙を流し別れ、今度はもし何があっても、“おひとりどうぞ”!? と肝も据わってきた頃でした。そして事業団の企画公演、初めて観せていただいたのは、憧れの二期会プリマの加藤典子先生の「ポーギーとベス」でした!! のちにボトムラインでリサイタルをした折に「ポギベス」からなんと8曲も歌いましたが、その中で黒人の女親分が麻薬密売人に怒って吐き捨てるように歌う曲が、今で言う“ラブ”でした。

話を戻し、設立当初の二期会を主人の転勤で離れ、戻ってきたときには浦島太郎!? やっとさせていただいたのが「シャーロツ

クホームズ」。その折の共演者、奥村晃平氏(今の二期会理事長)が名古屋市文化振興事業団企画公演「サウンド・オブ・ミュージック」のオーディションを耳にされ、「修道院長、受けたら?」。その一言で事業団のオーディションを受け、合格!! その時は、通常の2月公演に加え、12月にも公演があり、計10回修道院長をさせていただきました。それが御縁で8回くらいオペレッタやミュージカルに出演させていただいたかと思います。

若い頃は、歌う人生の終わりは50歳位だろうと思っていました。次々と課題を追いかけているうちに50歳を過ぎ、60歳も成長期。そろそろ映画で観た修道院長様の年齢に近づいてまいりました。今の時代はクラシックだけでなく、歌手はいろんな歌が歌えて当たり前、こちらが提供するだけでなく、お客様のニーズに応えていける歌手が必要とされています。

修道院長様、歌の人生をお与えくださりまして、ありがとうございました。先日大須でこっそり“伊勢佐木町ブルース”を变身して楽しんでしまいました。お許ください!!



30周年に寄せて

松岡 伶子

(松岡伶子バレエ団代表)

Reiko Matsuoka

名古屋市文化振興事業団の30周年に、心より御祝いを申し上げます。

30年前のことはなつかしく、過ぎた月日は昨日のこのように思い出されます。事業団の設立と芸術創造センターの建設という新しい息吹は、私達にとりまして嬉しく、わくわくする思いでした。あまり広くない、しかも変形な土地に、どんな建物が建つのが不安と期待の中で、建築家の方とも話し合い、今までにない実験劇場がほしい等々、精一杯の夢を語り合っていました。

こんな多くの期待の中で、芸術創造センターが建ち上がりました。黒くて一寸変わった建物は一瞬のとまどいもありましたが、人々を刺激し、新しい試みの作品の上演に力を注ぎ、面白い作品も生まれてきました。

これとほぼ同時に文化振興事業団が設立され初代理事長の亀山巖先生や、原陟先生という、幅広い知識を持った大先輩方を中心に、劇場の誕生と共に文化の発展を願い、常に人々の話題に上がっていました。

各委員会では熱心に検討され、先輩のアドバイスや、若い人々の情熱あふれる意見等々、今思い出しても心が熱くなる程です。こんな中で違ったジャンルの方々との出会いを通じ、それぞれに競い合う中で多くを学ぶことも出来ました。

今、この時代を振り返った時、あの頃、色々と指導していただいた先輩の年齢をすでに過ぎてている自分に、今更に我が身の未熟さを思い、恥じ入っている次第です。しかし若いエネルギーは私達を乗り越え、大きく羽ばたいて次の世代へと移ってっております。

個々の成長が文化を一層発展させてゆくのです。今、この地域だけにとどまらず、世界へと活動の場は大きく広がっております。この新しい時代に大きな期待をしておりますが、このように文化が発展出来たのも、文化振興事業団の役割が大きな基となっていると思うと同時に、今後、一層のお力添えがほしいと願っております。常に多くの方々語り合い、競い合う中で、文化が発展してゆくのではないかと、次世代のエネルギーに大きな期待をしております。



今も昔も変わらぬものは芸処

安田 文吉

(南山大学教授)

Bunkichi Yasuda

名古屋が芸処と言われるようになって久しい。この語の初見は明治初年の新聞と言われるが、それはともかく、徳川家康が城を作り、城下町を作って以来、ズーツと芸処だ。「昔は芸処だったが今は違う(芸処ではない)」とよく言われるが、こんな間違った認識では芸処名古屋が泣く。

藩祖義直公を初め、二代光友公、三代綱誠(つなのぶ)公、七代宗春公と代々の尾張の殿様が中心となって、芸事が武士から町人・農民に至るまで次第に幅広く広がっていった。開府から幕末に至るまで、徐々に広がった芸処は、底辺が広く、層の厚いものになっていった。

享保18(1733)年11月下旬の森八幡社で起こった遊女と畳職人との心中未遂事件を、享保8年に江戸南町奉行大岡越前守から出されていた「新作心中物禁止令」を無視して、当時来名していた宮古路豊後が、新作心中浄瑠璃『睦月連理玉椿(むつまじきれんりのたまつばき)』に仕立て上げ、翌享保19年正月に黄金葉

師で上演したところ大当たり、押すな押すなの群集で大入りだった。この大当たりを背景に江戸に乗り込み、翌享保20年春中村座で上演、これも大当たり。豊後節は一世を風靡することとなった。禁止令はまだそのままだったが、これに関する一切のお咎めは無かった。宗春公が後ろ盾になっていたから。元文4(1739)年に宗春公が失脚すると、豊後節も全面禁止。しかし、その後豊後節から常磐津と新内が、常磐津から富本が、富本から清元が生まれるに至って、その大元の名古屋の面目は躍如たるものがあった。常磐津も清元も現在歌舞伎になくはならぬものになっている。

これはほんの一例だが、茶道・香道・華道も盛んだし、バレエ団もその数は日本一だし、新聞社などの文化センターの講座の数も多い。習い事の習慣が生活に根付いているのが芸処たる象徴だ。名古屋こども歌舞伎も今年で4年目だが、当文化振興事業団の後押しもあって、毎年60~70名前後の新入座員がある。まさに芸処名古屋は今も元気いっぱいだ。



今後の「事業団」に期待する

山中 義幸

(名古屋演劇鑑賞会 会長)

Yoshiyuki Yamana

名古屋市文化振興事業団が設立30周年を迎えられ心よりお喜び申し上げます。

「事業団」が設立された当時、名古屋の文化芸術のおかれた環境は、決して恵まれたものではありませんでした。文化施設は圧倒的に不足していましたし、地域の芸術・文化団体や市民は自分たちが自由に発表する場もない状況でした。

1979年、時の内閣、大平首相は『文化の時代の到来』と施政方針で国民に呼びかけました。政府の世論調査でも『心を重視する』が『物を重視する』を凌駕したことなどが報じられていました。これまで豊かさを求めて努力してきた人々が、手にした豊かさの中には必ずしも真の幸福も生きがいも発見できなかった、という現実が『自分たちの意識や生活をもう一度見直そう』とする気運の中で、民間の劇場も建設ラッシュを迎えます。

この時期、名古屋市が、市民文化の現状、課題、文化施設を検討する『市民文化懇談会』を設置し、そこでの議論が整理され『市民文化をすすめるための提言』として市長に答申されました。この「提言」が、その後の名古屋の文化、芸術の発展に大変大きな役割を果たすことになったと思います。この提言は名古屋での文化活動を育成するためには文化施設の整備が急務の課題であると指摘し、また、この中には芸術創造センターの建設、市

民文化振興事業積立基金(文化基金)、市文化振興事業団の設立などがあり、今日の名古屋の文化行政の柱にもなっています。

その後の名古屋の文化活動の充実、発展には事業団の「力」が大きな役割を果たしてきたと思います。毎年2月には地元で活躍する舞台関係者の総力を結集して企画し公演されるミュージカルなども恒例化され、華やかで楽しい舞台として好評です。また、秋の市民芸術祭も名古屋で活躍する芸術家や芸術文化団体の優れた演技や技術を競うもので、今後も残したいものです。

また、市内にある文化小劇場の充実、他府県からは羨ましい存在として評価されています。今や地域の文化活動の拠点となり、市民の自主的な文化活動の場として広く親しまれるようになってきています。企画面でも新しい工夫があり内容面でも充実してきています。

また事業団が管理・運営する23の文化施設の今後についても、新たに『劇場法』の制定などで果たす役割はますます重要になってきています。地元の芸術家、芸術文化団体などと親密な連携を図りながら、『文化の香り高いまちづくり』を理念に市民文化の創造と新しい文化施設、文化事業の拡充をめざした新たなスタートを期待しています。

あいちトリエンナーレ2013 / Aichi Triennale 2013

テーマ：揺れる大地—われわれはどこに立っているのか：場所、記憶、そして復活
Awakening—Where Are We Standing?—Earth, Memory and Resurrection

57万人を超える方々にご来場いただいたあいちトリエンナーレ2010から3年、再び愛知が現代アートに包まれます。国内外のアーティストによる現代美術作品の展示や、パフォーマンスアーツやオペラの舞台公演をとおして、世界最先端の現代アートをお楽しみください。世界で活躍する100組以上のアーティストが愛知を訪れ、ここでしか見られない作品を発表します。世界のアートが共振する芸術祭がいよいよスタートします。

芸術監督

五十嵐太郎 (東北大学大学院工学研究科教授 (都市・建築学))

会期

2013年8月10日 (土) ~ 10月27日 (日) (79日間)
※休館日・開館時間は会場によって異なります。

会場

愛知芸術文化センター
名古屋市美術館
名古屋市内のまちなか (長者町会場、納屋橋会場)
岡崎市内のまちなか (東岡崎駅会場、康生会場、松本会場)
※その他、オアシス21、テレビ塔などの都市空間で展開

主な出品作家

[現代美術] ヤノバケンジ、オノ・ヨーコ、リチャード・ウィルソン等75組程度
[パフォーマンスアーツ] イリ・キリアン、ままと、やなぎみわ等15組程度
[プロデュースオペラ] 蝶々夫人 (指揮 カルロ・モンタナーロ、演出 田尾下哲)

主催

あいちトリエンナーレ実行委員会

お問い合わせ先

あいちトリエンナーレ実行委員会事務局
〒461-8525 名古屋市中区東桜1-13-2 愛知芸術文化センター6階
TEL 052-971-6111 <http://aichitriennale.jp/>



ヤノバケンジ(サン・チャイルド)2011

平成25年6月25日発行(隔月1回25日発行)通巻351号
編集発行/公益財団法人 名古屋市中区栄三丁目18番1号
名古屋市中区栄三丁目18番1号
TEL (052) 249-9385 FAX (052) 249-9386
HP <http://www.bunkaz758.or.jp/>

TVS

美と輝きの瞬間

人々の信頼を広げ、出逢いをつくり、感動を映像に残します

株式会社 **東海ビデオシステム**

〒460-0013 名古屋市中区上筒津2丁目14番15号
TEL.052-322-6541 FAX.052-322-6638
<http://www.tvs.co.jp>

舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ハイビジョンで撮影し
ブルーレイディスクでお渡しします。

ビデオソフトの企画制作

有限会社 **エーワン・ビデオ・システム**
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

innovason Ether
LACOUSTICS ES
lake Sound
whirlwind

■ホール舞台音響設備 販売、設計、施工、保守

AV 株式会社エーアンドブイ

〒464-0846
名古屋市中区千種区城木町二丁目98
TEL 052 (761) 5400
FAX 052 (761) 0909

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,300円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

MP MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ

〒464-0850 愛知県名古屋市中区千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
TEL (052) 735-3151 FAX (052) 735-3152 E-mail: mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

業務内容 ①舞台の企画・制作マネージメント ②イベントの企画制作
③芸術団体のコンサルティング ④舞台・イベントの運営